

2023年7月26日、英国の呼吸器雑誌:Thoraxに当院呼吸器内科(筆頭著者:三木啓資先生)からの論文が受理されました。

「Laryngeal widening and adequate ventilation by expiratory pressure load training improve aerobic capacity in COPD: a randomised controlled trial」  
(呼気圧負荷トレーニングによる喉頭拡張と適切な換気は COPD の有酸素能力を向上させる:  
ランダム化比較試験)

三木啓資<sup>1</sup>, 辻野和之<sup>1</sup>, 福井 基成<sup>2</sup>, 三木真理<sup>3</sup>, 北島 尚昌<sup>2</sup>, 住谷仁<sup>1</sup>, 橋本和樹<sup>1</sup>, 横山将史<sup>1</sup>, 橋本尚子<sup>1</sup>, 新居卓郎<sup>1</sup>, 松木隆典<sup>1</sup>, 木田博<sup>1</sup>, EPT 研究グループ

(<sup>1</sup>大阪刀根山医療センター呼吸器内科 <sup>2</sup>医学研究所北野病院呼吸器センター <sup>3</sup>徳島県鳴門病院内科)

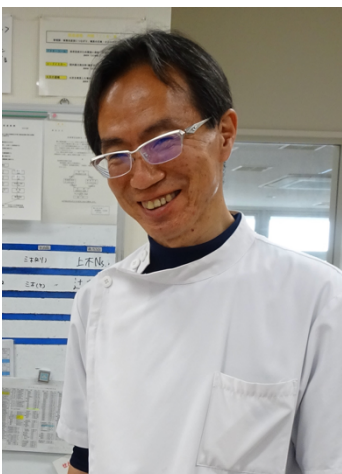
論文は <https://thorax.bmj.com/content/early/2023/09/11/thorax-2022-219755> にて閲覧ください。

EPT前後の声門閉塞変化: 病期 III 症例



要旨: 長年、慢性閉塞性肺疾患 (COPD)の息切れは末梢気道閉塞に起因する症状とされ吸入薬中心に治療されてきましたが、息切れの十分な改善には至っておりませんでした。私たちは当センター独自の取り組みとして呼吸リハビリテーションに”呼気圧負荷トレーニング(EPT)”を取り入れ、実践してきた結果、下気道疾患である COPD の息切れが上気道の声門閉塞によることがわかり、更に、

EPT を行うと運動中に生じる過度の声門閉塞が回避され、進行した COPD にも拘わらず類例のない程、最高酸素摂取量\*が増加し運動耐容能が改善することを見出しました。この新たな疾患概念や新たな治療概念は医学的な新規性、進歩性のみならず産業発展性も有していると考えており、今後20~30年と異なる臨床シナリオにおいて多くの方々により検証され、息切れに苦しむ患者さまの一助へと繋がっていく筈と考えております。(\*最大運動時、1分間に体重1kg あたり取り込める酸素量の最大値、心肺機能検査で測定できる運動能力指標で予後因子でもある)



三木先生より一言: 2017年ある患者様から「動いてしんどいとき、口すぼめ呼吸をするより、ぱっと息をはいた方が楽だ」というこれ迄の通説とは異なる一言が本研究の糸口でした。英国の歴史ある雑誌:Thoraxから受理を頂けたのもその患者さまに出会え、頂いた一言を命題として考えるという楽しい時間にめぐり逢えたからで心より感謝申し上げます。しかしながら、これで本研究が結実した訳ではなく、現在、当センターでは息切れでお困りのCOPD患者さま(GOLD II~IV期)を対象に「慢性閉塞性肺疾患への呼気圧負荷トレーニングに対する運動療法の上乗せ効果-多施設無作為化コントロール比較試験-」を実施しております。今後もCOPDの息切れ改善に向け頑張る所存でございます。皆様、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。